

特集◆トピックスで追う図書館とその周辺

大学生に「図書館」を伝える

—文教大学越谷校舎における教養教育授業「現代社会を生きるための図書館学」の試み—

鈴木正紀

1. はじめに

本稿では2012（平成24）年度より文教大学越谷校舎で展開されている、図書館員が教養教育として図書館に関する授業を行うという事例を報告する。

情報リテラシー教育、図書館利用教育の一環として図書館員が授業を実際に行うといった事例はこれまでも京都大学や明治大学にも存在する。その内容は学生の図書館活用能力、主として情報探索、検索スキル向上を主たる目的としており、演習も多く取り入れられていることに特徴がある。

本学の場合はそうしたことを視野に入れつつも、むしろ「図書館一般」とその関連事象について学生に伝えることを目的としており、教養科目のひとつとして位置付けている。

以下で、立ち上げに至る経緯と、授業の内容、今後の展望について述べてゆく。

2. 授業がはじまるまで

2009年4月に当館の図書館長として向嶋成美文学部教授（専門は中国古典文学）が着任した。

その向嶋館長から、正確な言葉はすでに忘れてしまったが、「みなさん（注：専任職員）の知見、知識を授業という場で学生に伝えてみてはと思いますが、どうですか」という提案があった。記録をたどると、職員の会議体では2010年の秋口から検討が始まっている。館長がなぜこうしたことを提案したのか、今となっては推測するしかないが、本学の図書館専任職員は全員が司書有資格者で、図書館専門職として処遇されている。それがすべてではないが、私たちの仕事の様子、館長との個別の会話などから、職員それぞれが一定レベルのスキル、知見を持っており、そうしたものを学生に提供しない手はない、と考えたのではないかと思われる。

授業として立ち上げるため、2011年度に入ってから、この年度より図書館長となった岸田直子教授は前館長の方針を引継ぎ、当時の館長補佐と

もに各方面との折衝にあたった。その過程で、教育課程の中に「総合講座」という教養科目の枠があるので、そこを使ってはどうか、ということになった。教養科目ということであれば、原則として受講人数の制限をかけることもできなくなることから、内容についても後者（教養的内容）でいくことに議論が取れんされていった。

個々の職員が授業を担当するか否かについては、個別に意思確認を行い8名中5名が担当することとなった。また、湘南図書館の職員からも応援を得たいということで1名の職員の出講を得た。また、教員からは図書館長以外に2名の教員に担当をお願いすることとなった。

3. 授業の状況

本学はセメスター制を採用している。本稿で紹介している授業は秋学期に開講されており、15回構成となっている。初年度である2012年度の全体の構成は表1のとおりである（シラバスより）。

授業初回と最終回はコーディネータである図書館

表1 2012（平成24）年度授業構成

回数	各回タイトル	内容	担当者
1	オリエンテーション	この授業の目指すもののアウトラインを説明する	図書館長
2	公共図書館／国立国会図書館	公共図書館、国立国会図書館のサービスを紹介する。日常および卒業後にこうした機関を利用するための基礎的事項を解説する。	図書館員
3	学習と図書館	他国の事例も踏まえながら、学校での学習に図書館はどうか関わっているのかを理解させる。	図書館員
4	越谷図書館の歴史と役割	越谷図書館の事例を通して図書館が大学の教育研究活動に果たす役割、また地域社会との関わりについて理解させる。	図書館員
5	メディアの歴史(1)	人間は自らの記憶をどのように記録してきたのか(1)：巻子本、写本、印刷本の拡散期まで。	図書館員
6	メディアの歴史(2)	人間は自らの記憶をどのように記録してきたのか(2)：現在の図書館が扱っている印刷メディアを中心に、それぞれの特性を理解させる。	図書館員
7	メディアの将来（デジタル教科書の動向を含む）	人間は自らの記憶をどのように記録していくのか：今後ますます普及が予想される、電子メディアの特性と、今後の展開について、検討を行う。	本学教員
8	図書館の分類	事物を理解・認識するための技術としての分類に関する一般的な理解と、それを踏まえた図書館の分類について理解させる。	図書館員
9	研究と図書館	図書館はどのように研究活動に役立つか。	本学教員
10	学習・研究と著作権	「コピーはなぜいけないのか。引用の作法。紙ベースだけでなくインターネットによる情報発信と著作権の関係について理解する。	図書館員
11	情報の蓄積と検索	情報を蓄積するための知識・技術：データベースの構造と検索の理論について理解する。	図書館員
12	図書館ネットワーク	文献が近代に届くまでの仕組みを図書館ネットワークの現状を交えて理解する。	図書館員
13	出版流通と図書館	日本の「手元における」出版・流通について、歴史的職能を行い、特徴を把握する。	図書館員
14	学術図書館のトレンド	学術図書館の新しい動きを紹介する。	図書館員
15	まとめ	学生の受講レポート発表と図書館長によるまとめ	図書館員
	受講者へのメッセージ	大学図書館は、単に過去の知財の宝庫ではありません。皆さんの学習を支援する力強い仲間です。図書館についてもっとよく知り、もっと賢く利用するために、この授業を役立ててください。	

館長が担当し、初回はオリエンテーションとして授業の狙い、評価方法などについて説明をする。以後は、担当者の裁量で構成した授業を展開するようになっている。

授業を通じての目的は、「図書館情報学」の「学」としての体系を学ぶということに主眼はなく、学生自身が生活していく上で生かしていける知識、スキルの習得が重視されている。分類法など「学」をベースとする講義もあるものの、それ以上に図書館とそれに関連する事象を知ってもらいたいという狙いがある。

その後、毎年さまざまな事情から細かい構成の変更を行ってきている。そうした中で2017年度は、その前年度で岸田館長が退任するというのも一要因として、コーディネータを図書館長から本学司書課程担当の大場博幸准教授が担当することになった。それを機に構成の見直しも行い、担当で議論し表2に示す構成となった。学生が身に付ける知識の望ましい順序という観点から順番を組み換え、新たに学校図書館のコマを入れるなどの変更を行っている（「地域文庫／あのみ文庫」は、当館で展開している「あのみ文庫」スタッフによるもので2016年度より導入している）。これにより一般的にいわれる図書館の各館種について扱うコマが確保できた。

受講者数の推移を表3に示す。表中、教育学部

表2 2017(平成29)年度授業構成

回数	タイトル	内容	担当者
1	イントロダクション	この授業の目指すもののアウトラインを説明する	コーディネータ
2	学びと図書館	他国の事情も踏まえながら、学校での学習に図書館はどうかかわっているのかを理解する。	図書館員
3	図書館各論：大学図書館	大学における大学図書館の役割、実際のサービスについて解説する。	図書館員
4	目録情報の見方	OPACによる図書・雑誌の検索結果をより深く理解するために、各項目の意味等の解説を行う。	コーディネータ
5	情報の蓄積と検索	情報はと何か。定義を確認し、web情報とデータベースで得られる情報の違いを解説する。	図書館員
6	図書館のネットワーク	文献が手元に届くまでの仕組みを図書館ネットワークの現状を交えて理解する。	図書館員
7	図書館をめぐる法と権利	図書館運営・利用に関する各法令と図書館の関わりなどについて、主に利用者の観点から紹介する。	図書館員
8	図書館資料の分類	事物を理解・認識するための技術としての分類に関する一般的な理解と、それを踏まえた図書館の分類について理解する。	図書館員
9	メディアの将来（デジタル教科書の動向を含む）	人間は自らの記憶をどのように記録していくのか：今後ますます普及が予想される、電子メディアの特性と、今後の展開について、検討を行う。	本学教員
10	資料保存	図書館の基本機能は資料の収集、組織化、保存、利用にある。資料保存について具体的な事例を盛り込みながら説明する。	図書館員
11	図書館各論：学校図書館	学校図書館の業務、サービス、現状について解説する。	外部講師
12	図書館各論：公共図書館／国立図書館	公共図書館、国立国会図書館のサービスを紹介する。日常及び卒業後にこうした機関を利用するための基礎的事項を解説する。	コーディネータ
13	図書館各論：専門図書館	企業内図書館の蔵書構成やサービスについて説明するとともに、製品開発や先端研究を担う技術者・研究者の図書館機能の活用の様子を紹介する。	図書館員
14	図書館各論：地域文庫／あのみ文庫	地域家庭文庫の概要について説明し、本学のあのみ文庫の活動を紹介する。	外部講師
15	まとめ：これからの図書館	質疑、応答	コーディネータ

の受講者が2015年度を除いていないことに気づかれるだろうが、これはカリキュラムの関係で、授業を履修しても単位とならないということが原因と考えられる。しかし、2018年度からはそのカリキュラム自体が改訂される予定なので、どのような推移が見られるか、現時点では予測は付かない。2015年度までは総受講者数は200名前後で推移していたが、2016年度から急激に増え始めた。担当者による授業後の成績処理等の負担を考えると、すでに限界に近い人数である。

表3 受講者数の推移

	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
受講者総数	176	172	242	204	372	410
教育学部	0	0	0	2	0	0
人間科学部	71	39	75	102	207	227
文学部	105	133	167	100	165	183

授業の形態はシンプルである。担当者は授業の組み立てを考え、それをプレゼンテーションソフトに落とし込んでいく。その一方で受講生への配付資料を作成し、事前に印刷をし授業に臨む。担当者によっては書画カメラを使って実際の資料を見せたりといったこともしている。

評価は以下のように行っている。2016年度までは、年度ごとに多少の相違はあれ、授業担当者が担当時間の最後に小テストを行い、評点を付ける。それがすべて終わったところでコーディネータがそれらをもとにして総合的評価を行い成績を付ける、という形である。評価を出す前提として一定回数以上の出席を条件としている。2017年度については、専任職員の担当授業（複数回担当している職員もいるため）の1回において小テストを行い、それらを考慮してコーディネータが総合評価を行うという方式に改めた。

4. 学生の受講動機

この授業は学部学生1年生から4年生までが受講できる。表4を見ていただくとわかるように1、2年生の受講者が圧倒的に多い。

表4 学年別受講者数の推移

	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
1年	79	34	58	59	164	199
2年	52	91	125	96	110	136
3年	30	35	43	35	76	46
4年	15	12	16	14	22	29

受講者はなぜこの授業を受講しようと考えたのか。筆者が今年度担当した回でこの点について聞いてみた。回答をいくつか紹介する（回答は2017年度の第1回、第2回の授業終了時点でのもの）。

・私は将来教師になりたいと思っています。小・中・高のどの先生になろうと図書館は必ず学校

にあるものです。その中で、授業などの調べ学習やグループワークなどで図書館を利用した授業を行うかもしれません。その時に図書館のことをなにも知らずに生徒の前に立ってはいけないと思いました。(以下略)

- ・図書館司書課程を履修しており、図書館について興味があることに加え、図書館のスタッフの方々が講師を務められるということも聞いていたため、司書課程の授業以外にも図書館に関する授業があるならば履修してみようと考えたため。
- ・(注:授業名である)「図書館学」に注目しがちだったが、「現代社会を生きるための」という、これから生きていく上で必要な知識まで学べるというのは非常に魅力的だった。
- ・この授業は多くの図書館のある姿を見たり、文科省が提示している学士になるには…(注:授業中に「学士力」のことで説明した)など、図書館のことだけではなく、それ以外の関連事項を第1回、第2回の授業で学ぶことができました。
- ・図書館は利用するものの、その仕組みや在り方に謎が多いから。学校にも市にも必ず図書館はある。しかし、そこで授業を行うわけではない。「なぜ図書館?」と思ってしまったから。

受講生の中には4年生となって教養科目の単位が足りず受講した、といったドライな回答も見受けられる。また、先輩から口コミで面白い授業だといったことを聞いて受講する学生も存在する。総じて「図書館について知りたい」という意向がうかがえる。

5. 授業内容

紙幅の関係で授業の詳細について述べることはできないが、筆者の担当する「学びと図書館」について概要を紹介しておく。

授業はパワーポイントのスライドに沿って進めていく。まず冒頭で、日本の授業というものが明治時代から現代にいたるまで教師と学生(生徒)が対面して行う形式であり、それは100年以上にわたって基本的には変わっていないことを指摘する。それを受けて、フィンランドや米国の初等教育で行われている、対面型ではない授業の様子を主として写真を使って紹介する。そこから日本の教育改革の動きに触れ、今後アクティブラーニングや反転授業といった、欧米型の授業が日本の学校教育のあらゆる段階で導入することが予定されており、その背景には、知識には「知識そのもの」と

「知識を取得するための知識」の2種類があるといったサミュエル・ジョンソンの言葉を紹介し「自ら学ぶ力」が重要視されていることについて説明する。その背景にある「学士力」に関する議論を紹介し、日本の大学生の25歳以上の比率が2.5%しかなく国際的にみれば極めて異例であることを説明するなど、学生の持っている「常識」を壊すことも意識的に行っている。

<p>本日のトピック</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「学ぶ」とはどういうことか 2. 北欧・北米(フィンランド・カナダ・米国)の生徒・大学生はどのように図書館を使い、学んでいるのか 3. 知識とはなにか 4. 大学図書館員は、大学教育と図書館の関係についてどのように考えているか、そのうえでどんなサービスをしようとしているのか 5. 「学士力」に関する議論 6. 生涯にわたる学びと図書館

◀第2回「学びと図書館」のトピックを示したスライド

6. おわりに

本授業は今年で6年目を迎えた。図書館員たちは最初こそ構成の検討や資料作りに苦労しながらも年々慣れてきており、授業内容も練度を増しているように見受けられる。

図書館という社会的インフラの諸相とそれに関連することがらを図書館員が学生たちに伝えるというこの試みは、どれほど学生に影響を与えるのかは、授業タイトルに「現代社会を生きるための」とあるように、在学中もそうではあるが、むしろ社会に出てからさまざまな場面に遭遇したときに明らかになるのではないだろうか。

「大学図書館職員が、教員や学生とコミュニケーションを図りながら教育課程の企画・実施に関わることも必要である」。これは、2010年、文科省科学技術・学術審議会の学術情報基盤作業部会から出された「大学図書館の整備について(審議のまとめ)ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー」の一節である。本学の試みはこれを意識して始めたものではないが、図らずも同じ方向を向いているようである。長期的展望は正直なところあるとはいえない。1年1年、「図書館員が知見・知識、図書館の諸相を学生に直接伝える」という原点を確認しつつ進んでいきたいと考える。

なお、本稿で述べられている見解は筆者個人のものであることをお断りしておく。

【後記】

この稿の依頼を受けたのちの2017年10月、本授業の立ち上げに奔走された向嶋成美元館長が急逝された。記してご冥福をお祈りする。

(すずき まさのり: 文教大学越谷図書館)

[NDC10:017.7 BSH:1.図書館教育 2.大学図書館]